

大雪山国立公園における登山道のグレードの設定(案)

1. 設定の背景～登山道管理水準の見直し～

大雪山国立公園では、利用の中心施設である登山道を適切に保全管理するため、大雪山特有の自然条件、利用状況等を勘案し、登山道の区間毎の地域特性に応じた複数の管理方法（管理レベル）を定めた「大雪山国立公園登山道管理水準」を策定するとともに、登山者自身が自己責任の下で登山や自然環境に配慮した行動を行う上での大雪山における登山の心得をまとめ、平成18年3月に「大雪山国立公園登山道管理水準及び登山の心得」（<http://www.env.go.jp/park/daisetsu/data/files/daisetsu01.pdf>）として公表し、登山道の保全管理や登山者への普及啓発に努めてきました。

近年、局地的な集中豪雨による登山道の急激な荒廃進行、崩落等による通行止め、外国人登山者の増加等、大雪山国立公園の登山道の荒廃状況や利用状況が策定時から大きく変わり、登山道の保全管理についても「協働型管理」と呼ばれる地域内外の多様な主体が保全管理作業に参画する新しい活動の形が見られるようになりました。

一方で、現行の登山道管理水準は、登山道の保全管理に携わる行政機関や山岳会等の関係者（以下「登山道関係者」という。）や登山道を利用する登山者に十分に認知・活用されていないなど、以下の項目について課題が挙げられています。

このような状況を踏まえ、北海道地方環境事務所では、平成25年度より登山道現況及び周辺状況に関する基礎調査を実施し、「大雪山国立公園登山道管理水準等検討会」を開催し、「大雪山国立公園登山道管理水準及び登山の心得」の見直しを進めてきました。

見直しにあたり、登山道の区間毎に、どう登山施設を整備し利用されるべきか、そのために必要な自然環境はどうあるべきかを定めていた「保護・利用体験ランク」と、自然環境の脆弱さや現況の荒廃状況等に応じて設定されていた「保全対策ランク」を分けて再設定することとしました。なお、「保護・利用体験ランク」という名称については、登山者への周知の促進も見据え「大雪山グレード(利用体験ランク)」と変更しています。

課題1：対象路線の見直しが必要

- ・ 前回対象外の路線の取り扱い（公園計画に定められていない路線）
- ・ 利用できない路線の取り扱い（崩落、廃道、管理者不在、林道通行止め）

課題2：登山道の現状が現行の登山道管理水準と合っていない

- ・ 現状と登山道管理水準が整合していない区間の抽出とその要因の分析
- ・ 登山道管理水準の設定方法の見直し
- ・ 現状を踏まえた区間への当てはめ直し

課題3：登山道管理水準が認識、活用されていない

- ・ 大雪山登山道に係る多様な主体（行政・山岳関係者）の参画による見直し
- ・ 国内外から訪れる登山者への普及・広報を意識した表現、活用法の見直し

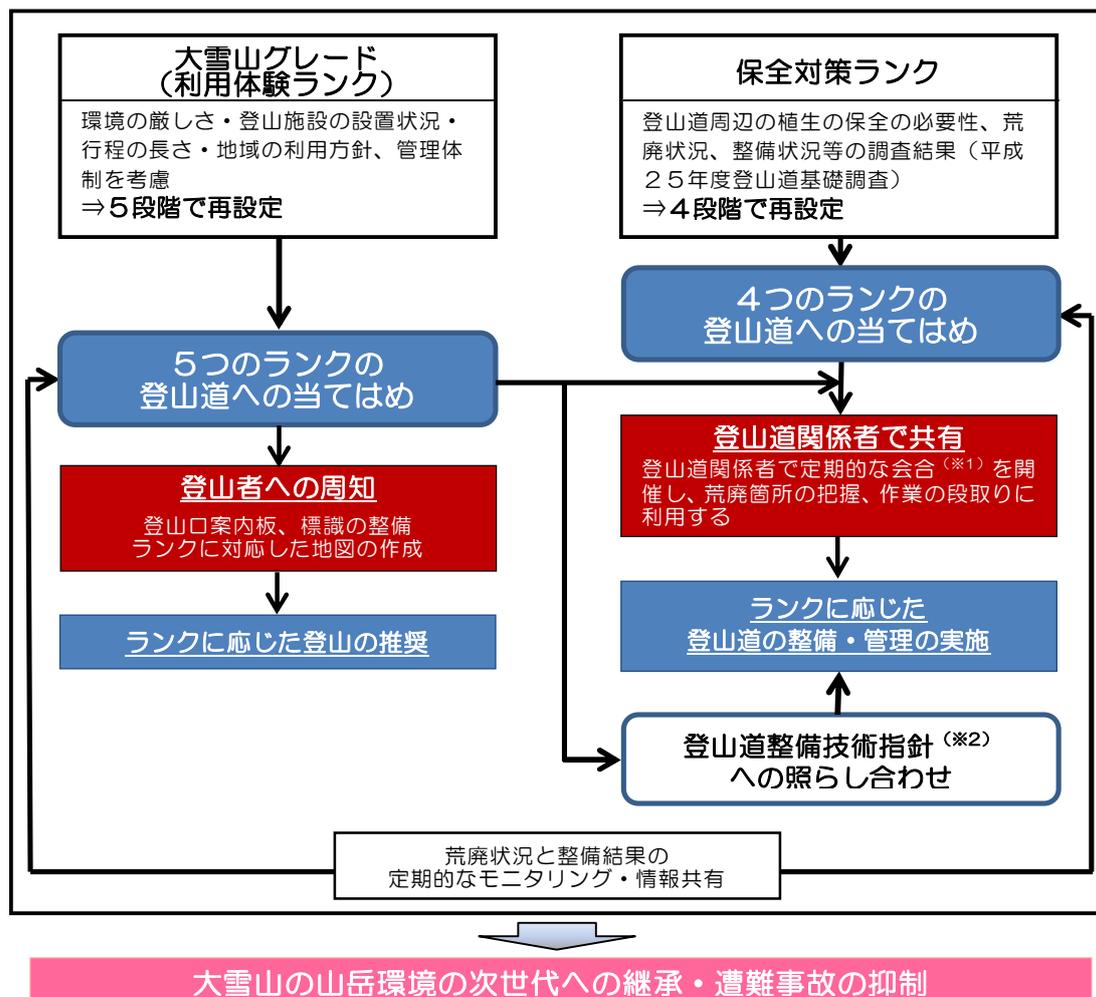
2. 大雪山国立公園登山道の新たなランク付けの構成と活用

大雪山国立公園の新たな登山道ランクは、「大雪山グレード（利用体験ランク）」と「保全対策ランク」により構成されます。

大雪山グレード（利用体験ランク）は、登山道の区間毎に異なる自然条件、利用状況を元に、登山者に提供する登山体験の程度や登山者が自己責任で行動判断を行う時の目安として5段階で設定したものです。（P3～P7参照）

保全対策ランクは、登山道周辺の植生の脆弱性及び登山道の荒廃の程度や整備状況等を勘察し、登山道周辺の自然植生や登山道及び登山施設の保全上の課題の程度を4段階で設定したものです。（P8～P10参照）

登山道関係者は定期的な会合^(※1)において登山道の荒廃状況等を共有し、保全対策ランクの見直しをしつつ、保全管理の作業の段取りを進めます。作業の実施に当たっては別途作成する「登山道整備技術指針」^(※2)で確認し、大雪山グレードに応じた工法等を選定して実施できるようにします。登山者に対しては、大雪山グレードを明示した案内板や標識を整備し、ランクに応じた登山利用を促します。



※1 定期的な会合は、「大雪山国立公園山岳関係者による情報交換会」を想定
参考：http://www.env.go.jp/park/daisetsu/data/index.html(中段に平成 25,26 年度の会合資料掲載)
※2 登山道整備技術指針は、登山道の利用状況や植生等の状況、荒廃の程度に応じた保全修復の具体的かつ実用的指針として平成 17 年 3 月に策定し、現在改訂作業中
参考：http://www.env.go.jp/park/daisetsu/data/files/daisetsuO2.pdf(平成 17 年 3 月策定指針)

1

2

I 大雪山グレード（利用体験ランク）

3

4

1. 大雪山グレード（利用体験ランク）とは

5

6

大雪山国立公園は、日本最大の山岳国立公園で、登山道の総延長は約 300 kmに及びます。登山者でにぎわうメインルートや自然のままの静寂なルートなど、登山の熟達者から初級者まで楽しめる多彩なルートがあり、毎年多くの登山者が訪れています。

7

8

雄大な原生自然の山歩きは、大雪山国立公園の大きな魅力です。しかしながら、主稜部の自然条件は厳しく、未熟な登山者の遭難事故が後を絶ちません。また近年、至るところで登山道の荒廃が進み、高山植物や貴重な地形に損傷が生じており、生態系への影響が懸念されています。一方で登山施設の整備や保全管理は大雪山の持つ自然の雰囲気壊さないように行わなければなりません。

9

10

11

大雪山グレードは、登山道の区間毎に異なる大雪山特有の自然条件、利用状況をもとに、5つのランクに区分設定をしたものです。登山者に提供する登山体験の程度（区間における登山者が享受する雰囲気などの程度）を定め、これに応じた登山施設の補修や維持管理を行い、また、登山者が自己責任で行動判断を行う時の目安（区間における行動判断の難易度）として定め、力量に応じた登山を推奨するものです。これにより、登山道周辺の自然環境と奥深い雰囲気とを保全し、登山体験の確保と遭難事故の抑制を図ります。

12

13

14

15

16

国内外からの登山者にグレードがわかるよう、各登山口やグレードが変わる地点に、日本語・英語・ピクトサイン付でグレードを明示した案内板や標識を整備します。

17

18

19

20

21

22

23

24

25



Hiking trail



Mountain route

レベル別の道標



出典：SwitzerlandMobility website

26

27

28

29

30

31

32

図 大雪山グレードの活用例（標識、マップ）

33

2. 大雪山グレード（利用体験ランク）の設定

大雪山グレードは、夏山シーズンを対象とし、大雪山国立公園の利用可能なルート（国立公園計画の路線、その他登山利用の見られる作業道）について、地形・天候等による環境の厳しさ、登山施設の設置状況、行程の長さ、登山道の利用を提供する地域の利用方針及び管理体制といった評価項目から総合的に判断し、登山者に提供する登山体験の程度と登山者が自己責任で行動判断を行う時の目安を踏まえ、5つのランクに当てはめて定めます。各登山道の区間毎のランク設定の詳細は別紙1・P1～2（及び別紙2・分割図）を参照して下さい。

大雪山グレードの構成要素及び評価項目

| | 登山A | 登山B | 登山C | 登山D | 探勝路 |
|--------------|--------|-----|-----|-----------|-----------|
| 行動判断の要求度・難易度 | 高 | | | | 低 |
| 登山道の雰囲気 | 自然度の保持 | | | 一定の歩行の快適性 | |
| 登山口等からのアクセス | 遠 | | | 近 | |
| 天候判断の難易度 | 難 | | | | |
| 登山施設の充実度 | | | | | 充実 |
| 管理行為の充実度 | | | | | 充実 |
| 利用想定対象者 | 登山者 | | | | 観光客 含む |

大雪山グレード（利用体験ランク）

| | | |
|---|-----|--|
|  | 登山A | 大雪山の極めて厳しい自然に挑む登山ルート <ul style="list-style-type: none"> ・地形的条件等から天候判断がより難しく、かつ登山口からの距離や避難小屋の間隔が長くエスケープを取りづらい登山ルートや徒渉やへつりなど高度な技術を要する登山ルート ・自然の雰囲気の保持を最優先とした登山ルート ・登山者自らのリスク管理が必須とされ、極めて高度な行動判断を要求される登山ルート |
|  | 登山B | 大雪山の厳しい自然に挑む登山ルート <ul style="list-style-type: none"> ・地形的条件等から天候判断がより難しい登山ルートや登山口、ロープウェイ駅からの距離が長く日帰りに適さない登山ルート ・自然の雰囲気の保持を最優先とした登山ルート ・登山者自らのリスク管理が必要とされ、高度な行動判断を要求される登山ルート |
|  | 登山C | 大雪山の自然を体感する登山ルート <ul style="list-style-type: none"> ・登山口、ロープウェイ駅からのアクセスが比較的良く、日帰り程度の距離で設定された登山ルート ・歩行の快適性よりも自然の雰囲気の保持を優先した管理に努められている登山ルート ・登山者自らの一定のリスク管理が必要とされ、一定の行動判断を要求される登山ルート |
|  | 登山D | 大雪山の自然とふれあう軽登山ルート <ul style="list-style-type: none"> ・登山口、ロープウェイ駅舎からのアクセスが良く、比較的短距離で設定された登山者ルート ・段差処理、ぬかるみ対策など一定の歩行の快適性が得られる管理に努められている登山ルート |
|  | 探勝路 | 大雪山の自然とふれあう探勝ルート <ul style="list-style-type: none"> ・温泉施設やロープウェイ駅舎からのアクセスが良く、比較的高低差が少なく設定された観光客が利用できる一般観光利用者向けルート ・段差処理、ぬかるみ対策など一定の歩行の快適性が得られる管理に努められている探勝ルート |

※国立公園計画に定められた路線のうち、アクセス路の通行止め、管理状況から登山者に案内ができないものについては、「非適用」として「大雪山グレード」を適用していません。

※ピクトグラム（イラスト）は「仮」です。今後変更します。



図 大雪山グレード (利用体験ランク)

1
2
3

1 《大雪山グレード（利用体験ランク）の適用事例》
2 大雪山グレードの登山道への適用事例（探勝路を除く4つのランク）は次のとおりです。

3

4 登山Aの事例：オプタテシケ山～三川台～トムラウシ山

| | | |
|---|------------|---|
|  | 登山A | 大雪山の極めて厳しい自然に挑む登山ルート <ul style="list-style-type: none">・地形的条件等から天候判断がより難しく、且つ登山口からの距離や避難小屋の間隔が長くエスケープを取りづらい登山ルートや徒渉やへつりなど高度な技術を要する登山ルート・自然の雰囲気保持を最優先とした登山ルート・登山者自らのリスク管理が必要とされ、極めて高度な行動判断を要求される登山ルート |
|---|------------|---|

5 この区間は、大雪山国立公園の中でも最も人為的な整備が少ない登山道で、分岐における指導標
6 識、主たる山に設置された山頂標識以外の人工構造物は設置されていません。遅くまで大きな雪渓
7 が残る箇所やヤブ化した区間があり、ヒグマも多く生息しています。

8 ルート途中で野営指定地はあるものの、避難小屋はありません。登山口から遠くエスケープルー
9 トもない区間であるため、行程管理、天候判断等きわめて高度な行動判断が要求されるルートです。

10 原始性の高い自然の雰囲気保持を最優先とし、既存施設の確認等必要最小限の管理を行ってい
11 ます。

12



13

20 登山Bの事例：北海岳分岐～白雲岳分岐～白雲岳避難小屋

| | | |
|---|------------|--|
|  | 登山B | 大雪山の厳しい自然に挑む登山ルート <ul style="list-style-type: none">・地形的条件等から天候判断がより難しい登山ルートや登山口、ロープウェイ駅からの距離が長く日帰りに適さない登山ルート・自然の雰囲気保持を最優先とした登山ルート・登山者自らのリスク管理が必要とされ、高度な行動判断を要求される登山ルート |
|---|------------|--|

21 この区間は表大雪の中でも原始性が高い自然環境であり、縦走登山者が多く利用する区間です。
22 登山口から日帰りも可能ですが、長時間の強行行程となります。稜線上に位置し、天候判断を自ら
23 行い、最善の行動に向け判断する能力が要求されます。

24 この区間には、白雲岳避難小屋と白雲岳野営指定地があり、トイレも整備されています。原始性
25 の高い自然の雰囲気保持を最優先とした管理を行います。

26



27

28

29

30

31

32

1 登山Cの事例：姿見園地～旭岳

| | | |
|---|------------|--|
|  | 登山C | 大雪山の自然を体感する登山ルート <ul style="list-style-type: none">・登山口、ロープウェイ 駅からのアクセスが比較的良く、日帰り程度の距離で設定された登山ルート・歩行の快適性よりも自然の雰囲気保持を優先した管理に努められている登山ルート・登山者自らの一定のリスク管理が必要とされ、一定の行動判断を要求される登山ルート |
|---|------------|--|

2 この区間は、旭岳登頂、旭岳から裾合平の周回、旭岳ロープウェイから黒岳ロープウェイ間の日
3 帰り縦走等で利用されている大雪山のメインルートで、道内外から多くの登山者が訪れています。

4 この区間は、ガレ場が続く吹きさらしの強風地です。ルートは比較的明瞭で、好天時には問題の
5 ない道ですが、悪天候時には厳しい気象条件となります。また、濃霧になると旭岳からの下山時に
6 ルートを見失いやすく、遭難事故も発生しています。

7 ここでは、雄大な大雪山の自然の雰囲気を保ちながら管理を行います。



17 登山Dの事例：姿見の池～裾合平分岐

| | | |
|---|------------|---|
|  | 登山D | 大雪山の自然とふれあう軽登山ルート <ul style="list-style-type: none">・登山口、ロープウェイ 駅舎からのアクセスが良く、比較的短距離で設定された登山ルート・段差処理、ぬかるみ対策など一定の歩行の快適性が得られる管理に努められている登山ルート |
|---|------------|---|

18 この区間は、姿見の池から裾合平の往復に利用されるほか、旭岳登頂の下山コースや黒岳からの
19 縦走、愛山溪からの縦走に利用されています。夏山シーズン中はルートが明瞭で、歩きやすさに配
20 慮した登山道整備が行われています。ただし、シーズン初めは雪渓が残っているため、旭岳ロープ
21 ウェイ姿見駅のレクチャーを参考に慎重な行動が必要です。

22 ここでは、登山初級者が自然とのふれ合いを楽しむことができる、歩きやすく整備された道とな
23 るよう管理を行います。



II 大雪山国立公園 登山道の保全対策ランク

1. 登山道の保全対策ランクとは

大雪山国立公園の登山道では、登山道周辺の自然環境を保全するとともに登山を長く楽しむことができるよう、登山道及び登山施設に対する保全管理作業が、国や道、市町といった行政機関及び地元山岳会等の協力のもと行われています。また、近年は地域外の登山者・利用者からの協力得て保全管理を行う機会も増えています。

総延長約300kmに及び大雪山国立公園の登山道を適切に管理するためには、登山者に提供する登山体験の程度等を定めた「大雪山グレード」を保全管理に携わる登山道関係者の間で共有し、登山道の区間毎の管理目標について共通の認識を持つとともに、登山道及び登山施設の現況を把握し、課題のある箇所抽出を行い、課題の程度を評価することで、保全管理作業を進めるべき箇所の情報を共有することも重要です。

登山道の保全対策ランクは、登山道周辺の植生の脆弱性及び登山道の荒廃の程度や整備状況等を勘案し、登山道周辺の自然植生や登山道及び登山施設の保全上の課題の程度を4つのランクに区分設定したものです。円滑な登山道・登山施設の保全管理を進めるため、登山道関係者間で定期的に会合を開催し、課題箇所の把握、保全管理の優先順位及び作業の段取りに活用します。

また、保全対策ランクに応じ、当該区間の「大雪山グレード」に応じ適用できる保全工法の有無の確認や登山利用状況等を勘案し、登山道や登山施設の補修整備を検討します。



風衝地における侵食



登山道の複線化



木道整備による保全

2. 登山道の保全対策ランクの設定

保全対策ランクは、登山道の荒廃等による脆弱な周辺植生への影響や、登山道の持続的な利用の機会を失うような影響といった、登山道の保全上の課題の程度を示したものです。

平成25年に実施した登山道の基礎調査を基に、風衝草原、雪田草原、高層湿原、裸地といった自然環境の脆弱性が高く、保全の必要性の高い自然植生に該当する箇所の抽出を行うとともに、登山道の荒廃程度と、この10年間の荒廃の進行状況及び既に整備された木道や階段工といった登山施設の老朽度を総合的に判断し4つの段階に評価し、自然条件と荒廃状況の組み合わせで4つのランクに当てはめて定めます。各登山道の区間毎のランク設定の詳細は別紙1・P3～18（及び別紙2・区分図）を参照して下さい。

保全対策ランクは、現地の状況に応じて定期的に更新していくものです。登山道関係者間で定期的な会合を開催し、新たな荒廃箇所や登山施設の老朽化箇所、整備箇所の把握を行い、適宜見直しを行います。

| 要因1：自然条件（植生） | |
|--|--|
| 1 | 自然環境の脆弱性が高く保全の必要性の高い植生（風衝草原、雪田草原、高層湿原、裸地）がある |
| 2 | 上記1に該当しない |
| 要因2：荒廃状況（荒廃の程度、整備状況、木道等の状態、進行状況：地質、傾斜、利用圧） | |
| 1 | 登山道に大規模な荒廃がある、または登山道周辺に影響が及んでいる。 あるいは、木道等登山施設の破損や荒廃により通行困難な箇所が生じている。 この10年間で荒廃が急激に進行、あるいは、今後5～10年で著しい進行が予想される。 |
| 2 | 登山道に大規模な荒廃がある、または登山道周辺への影響が及んでいるものの、この10年の進行速度は遅く、今後5～10年での進行も遅いと予想される。 あるいは、木道、階段工等登山施設の破損や荒廃が見られる。 |
| 3 | 登山道に中規模、小規模な荒廃があり、この10年の進行速度は遅く、今後5～10年での進行も遅いと予想される。または現在侵食は少ないが潜在的危険性がある。 あるいは、木道、階段工等登山施設の整備済みだが、小規模な侵食が見られる。 |
| 4 | 登山道内に荒廃した区間が少なく、この5～10年で拡大する危険性が低い。 あるいは、木道、階段工等登山施設の整備済みで概ね安定している。 |

- 1 ※大規模な荒廃：幅3m以上、深さ・段差1m以上の侵食が複数ある
 2 中程度の荒廃：幅3m以上、深さ・段差1m以上の侵食が局所的にある、
 3 または、幅2～3m、深さ・段差0.6～1mの箇所が複数ある
 4 小規模な荒廃：幅2～3m、深さ・段差0.6～1mの侵食が局所的にある、
 5 または、幅2m未満、深さ・段差0.2～0.6mの荒廃箇所が複数ある
 6

7 **保全対策ランク（4段階）の設定：荒廃状況と自然条件の組み合わせ**

| 荒廃状況 自然条件 | 1 | 2 | 3 | 4 |
|--------------|---|-----|-----|----|
| 1 | I | II | III | IV |
| 2 | I | III | IV | IV |

8

保全対策ランク

| | |
|-----|--|
| I | 保全上の課題が極めて大きい区間 ・大規模な荒廃があり急激に進行した。または、今後10年で著しく進む恐れがある。 ・木道、階段工等登山施設の老朽化がひどい、通行困難箇所がある。 |
| II | 保全上の課題が大きい区間 ・保全の必要性が高い植生において、大規模な荒廃があり、徐々に進行している。 ・保全の必要性が高い植生において、木道等登山施設の破損や荒廃が見られる。 |
| III | 保全上の課題が中程度の区間 ・保全の必要性が高い植生において、荒廃が中程度以下で徐々に進行している。 ・保全の必要性が高い植生において、木道等登山施設が整備済みだが、小規模な侵食みられる。 ・大規模な荒廃があり、徐々に進行しているが、周辺植生の保全必要性が高くない。 ・木道等登山施設の破損や荒廃が見られるが、周辺植生の保全必要性が高くない。 |
| IV | 保全上の課題が顕著ではない区間 ・登山道の侵食は少なく、拡大の危険性がない。 ・木道等登山施設が整備済みで荒廃進行の危険性が小さい。 ・中程度以下の荒廃があり徐々に進行しているが、周辺植生の保全必要性が高くない。 ・木道等登山施設が整備済み箇所でも規模な侵食が見られるが、周辺植生の保全必要性が高くない。 |

9



図 保全対策ランク適用図

1
2
3

Ⅲ 大雪山国立公園登山道の新たなランク付けの 野営指定地、避難小屋への適用

1. 野営指定地、避難小屋への適用の考え方

山岳地帯における野営指定地は、公園計画に基づく正式な野営場ではなく、登山による無秩序な野営が植生の破壊を引き起こしたり、ヒグマを誘引したりすることを防ぐため、環境省、林野庁、北海道（道有林を含む）及び市町の合意として設定しています。

野営指定地は、限定された範囲に対して高頻度の利用が断続的にあることから、利用圧を受けやすく、特にトイレのない野営指定地については排泄を行うための周辺植生への踏み込みによる裸地化など影響が顕著に見られています。

野営指定地の配置や規模の変化・変更は、登山道利用に一定の影響を及ぼし、野営指定地周辺の植生に対して大きな影響を及ぼすため、独自の保全対策ランクを設定することが必要です。また、周囲の大雪山グレードとの対応を踏まえ、保全管理を行うとともに、野営の現状、課題等を踏まえ配置や規模を変更する際には、周囲の大雪山グレード及び近接する野営指定地との配置の関係性を十分に考慮し検討する必要があります。

避難小屋施設は、荒天時の避難施設の役割を持つほか、黒岳石室、白雲岳避難小屋といった夏山シーズンに常駐管理人を配置した施設においては、隣接のトイレや野営指定地を含む施設管理や、登山者に対する登山マナーの啓発の機能を有しています。

宿泊可能な避難小屋はテントを持たずに山中泊の山行を可能とします。そのため、その配置や規模、仕様の変更は、登山道利用に対して大きな影響を及ぼすことから、周囲の大雪山グレードとの対応を踏まえた管理を行う必要があります。また、施設の現状、冬季遭難対策、防災対策等を踏まえての再整備、撤去、新規整備時の配置・規模・仕様の変更に際しては、周囲の登山道の大雪山グレード及び他の避難小屋施設との配置の関係性を十分に考慮し検討する必要があります。



白雲岳避難小屋・野営指定地



南沼野営指定地

2. 野営指定地の保全対策ランクの設定

野営指定地の保全対策ランクは、登山道同様、自然条件と荒廃状況から設定します。

平成25年に実施した登山道の基礎調査をもとに、自然条件では、風衝草原、雪田草原、高層湿原、裸地といった自然環境の脆弱性が高く、保全の必要性の高い自然植生に該当する箇所立地するか否かの評価を行い、荒廃状況は野営指定地の荒廃程度と、この10年間の荒廃の進行状況から3つの段階に評価し、下表の組み合わせで4つのランクに当てはめて定めます。各野営指定地のランク設定の詳細は別紙1・P19を参照して下さい。

| 要因1：自然条件（植生） | |
|-------------------------------------|--|
| 1 | 自然環境の脆弱性が高く保全の必要性の高い植生（風衝草原、雪田草原、高層湿原、裸地）がある |
| 2 | 上記1に該当しない |
| 要因2：荒廃状況（荒廃の程度、整備状況、進行状況：地質、傾斜、利用圧） | |
| 1 | 既存の指定地の傾斜、起伏、侵食、ぬかるみ等荒廃が著しく、野営困難な箇所が生じている。または10年間で荒廃が急激に進行、あるいは、今後5～10年で著しい進行が予想される。 |
| 2 | 既存の指定地の傾斜、起伏、侵食、ぬかるみ等荒廃が見られ、野営困難な箇所が限定的に生じている。この10年の進行速度は遅く、今後5～10年での進行も遅いと予想される。 |
| 3 | 既存の指定地の傾斜、起伏、侵食、ぬかるみ等荒廃が見られない、又は荒廃は小規模であり、野営利用への影響がない。 |

野営指定地保全対策ランク（3段階）の設定：荒廃状況と自然条件の組み合わせ

| 荒廃状況 \ 自然条件 | 1 | 2 | 3 |
|-------------|---|-----|-----|
| 1 | I | II | III |
| 2 | I | III | IV |

野営指定地の保全対策ランク

| | |
|-----|--|
| I | 保全上の課題が極めて大きい区間 野営地の荒廃が著しく、野営困難な箇所が生じている。 登山者の野営や周辺植生への影響が生じている、懸念される。 |
| II | 保全上の課題が大きい区間 野営地の荒廃が見られ、野営困難な箇所が限定的に生じている。 周辺に保全対象となる植生があるため、周辺の自然環境への影響が懸念される |
| III | 保全上の課題が中程度の区間 野営地の荒廃は見られない又は荒廃は小規模であり、登山者の野営への影響はないが、周辺に保全対象となる植生がある。 野営地の荒廃が見られ、野営困難箇所が限定的に生じているが、周辺には保全対象となる植生は見られない。 |
| IV | 保全上の課題が顕著ではない区間 野営地の荒廃は見られない又は荒廃は小規模であり、登山者の野営への影響はない。周辺には保全対象となる植生は見られない。 |